



ミュージアムITトピック

# 博物館の間で進む 資料情報のネット公開

## ◎ 量と質ではなく、量か質…工夫で乗り切る博物館のネット対応

ネットで調べて、「ある」ということを確認して、足を運ぶ…。観光でもショッピングでも、インターネットはたくさんモノの中からお目当てのモノがあるかどうかを確認する情報収集ツールという役割が完全に定着しました。興味のあるモノを調べている時間は、ちょっとしたワクワク感を味わったりしますよね。

さて、博物館と言えば、「たくさん」の代表選手です。資料データベースをインターネット上にアップするだけで、利用者にワクワク体験を提供できるはず。でも、それを実現するためには、携わる皆さんの血の滲むような努力だけでなく、「事情が合えば」と

いう前提条件があります。

実際、専用のシステムでデータベースを運営している館でも、それをインターネット上で公開しているケースは、半数にも遠く及びません。公的機関として情報を出すからには、間違いがないか、表現に問題がないかを徹底的に見直す必要がありますし、せっかくなら画像や解説も付けたいところ。しかし、それが何万点もあれば、日常の仕事を考えて、「うちはまだまだ先」と仰るのも無理はありません。

そんな中で、ネット公開を実現している館は、どう対処しているのでしょうか。下のリストは、博物館クラウド<I.B.MUSEUM

SaaS>を使ってインターネットに資料データベースをアップしておられる館の例です。

こうした事例を眺めていると、あることに気づきます。それは、「インターネットに情報を出すのは大変」という意識は、「情報量を多く、データを詳しく」と考えるからではないか、ということです。ならば、両立は先送りにし、どちらか一方だけを目指してみてもどうだろう…と考えたのが、右のページ図です。

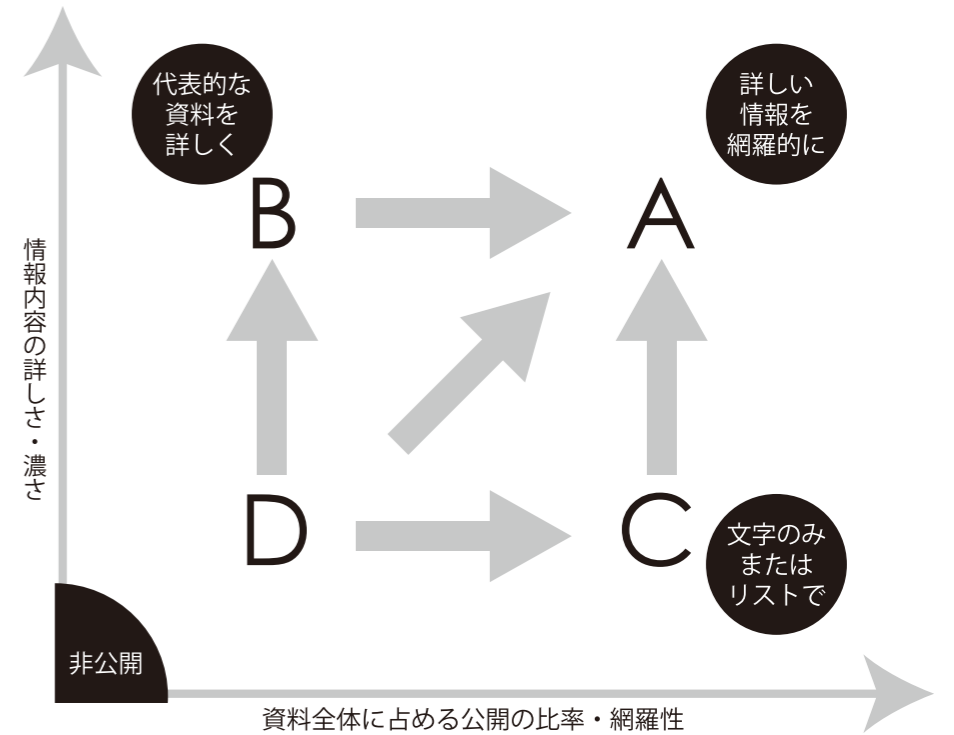
縦軸がアップする情報の詳しさ、横軸が多さを表しています。図のAゾーンにあたる、「量と質」を両立されている館は実はそれほど多くなく、たいていBかCに位置します。未公開(D)から、いきなり理想(A)へとジャンプするのは無理。そこで、「調べたい」という利用者ニーズに応えたいなら「網羅性」を有線してCゾーンを、「資料の面白さや魅力を知ってほしい」ならイチ押し資料を詳細な解説と画像付きで公開するBゾーンを目標とすればよいのです。

Bを実現するのは、資料の点数を絞り込

めば、簡単です。Cの場合も、データ項目を少なめに抑えれば、それほど負担はありません。まずはBかCでネット対応を実現し、余力ができたらずつAに近づける…というわけですね。

利用者からすれば、BやCでも十分にワクワク感は得られます。ご覧になった方から感想が届いたり、メディアで採りあげられたりすれば、それがまたAゾーンへと近づけるモチベーションにもなることでしょう。

こうした「ワクワク感の提供」は、ネット時代の現代ではとても重要です。そこで、博物館クラウド<I.B.MUSEUM SaaS>でも、「ワクワク提供機能」をいくつか用意しています。今回はそのうち二つほどご紹介いたしますので、どうぞご参考に。



## <I.B.MUSEUM SaaS>で資料情報のネット公開を実現した館

### ●福生市郷土資料室様

<http://jmapps.ne.jp/fussa/>  
考古、歴史、民俗、美術・工芸から、教育・文学、産業、写真・映像・音声まで、2万5千点もの資料情報を公開。画像も解説も充実しています。

### ●浜松市楽器博物館様

<http://jmapps.ne.jp/gakkihaku/index.html>  
タイムスリップ気分が味わえる数百年前の鍵盤楽器のデータが写真とともに公開されています。館のロゴを記したオリジナルのヘッダ画像が特徴的。

### ●鎌倉文学館様 資料検索 <http://jmapps.ne.jp/kmkrbgk/> 蔵書検索 <http://jmapps.ne.jp/kmkrbgk2/>

「1データ2公開」機能を活用し、資料と蔵書を分けて公開中です。

### ●岐阜県現代陶芸美術館様

<http://jmapps.ne.jp/momca/>  
画像に不正利用防止処理を施した陶芸作品データベース。ピックアップ作品では裏面や拡大画像を公開し、解説も充実。

### ●練馬区立美術館様

[http://jmapps.ne.jp/nerima\\_art/](http://jmapps.ne.jp/nerima_art/)  
グリーンを基調としたデザインで、館のロゴとイメージを統一。カラフルなピックアップ作品の画像が検索トップページを彩り、楽しさを演出しています。

### ●群馬県立歴史博物館様

<http://jmapps.ne.jp/grekisi/>  
(キッズ) [http://jmapps.ne.jp/grekisi\\_ed/index.html?from](http://jmapps.ne.jp/grekisi_ed/index.html?from)  
一般向けと子供向けの二つのデータベースを公開しています。子供向けにはクイズやパズルも用意され、楽しみながら学ぶことができます。

### ●田淵行男記念館様 <http://jmapps.ne.jp/tbcyok/>

昆虫生態研究者で自然写真家の田淵行男による昆虫の写真・細密画を公開。拡大画像もあり、昆虫図鑑のようなデータベースです。

### ●岩手県立博物館様 <http://jmapps.ne.jp/iwthkhk/>

館ホームページのリニューアルに合わせて試験公開。考古、歴史、民俗、生物、地質の5分野の資料が検索できます。



## I.B.MUSEUM SaaS 「ネットのワクワク感」支援機能 ①

### 🔄 季節に合わせてデザイン変更

I.B.MUSEUM SaaS のインターネット公開は、デザインをテンプレートから選び、ヘッダー画像を差し替えることで「自館らしさ」を演出できる仕組みとなっています。公開を実施する際だけでなく、いつでも、何度でもデザインを変更できるので、「企画展の開催に併せて」「季節ごとに」といった切り替えが可能。爽やかな白基調、高級感漂う黒基調…など、同じデータでもイメージを大きく衣替えることができます。

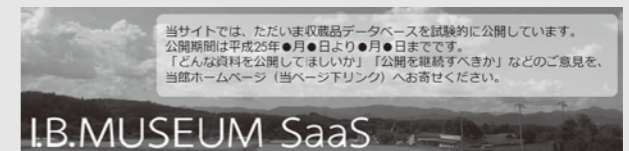
データの中身は同じのまま  
簡単な設定でデザイン一新!



簡単な設定変更でイメージ一新! 検索ページのデザインは、専用テンプレートを使えばいつでも変更できます。

### ? インターネット上に資料情報を出すこと自体が困難な場合は?

データがまだ十分ではなかったり、資料情報を外部に公開する場合は条例や規則の制定が必要だったり…といった事情をクリアしなければならない館は、「試験公開中」「試行版」など名称で、「暫定的に」始めてみてはいかがでしょうか。試験的なネット公開ならデータ点数が不十分でも大丈夫ですし、館のホームページ上で利用者の感想や意見を募れば、今後の本格開設への材料となりそうです。



たとえば、こんなヘッダを付けておけば、複雑な事情の壁も、比較的突破しやすくなるはずです。



## I.B.MUSEUM SaaS「ネットのワクワク感」支援機能 ②

### 英語版サイトで国際化

インターネットの素晴らしさは、国境に関係なく、必要な情報を必要な場所から取り出せるということ。最近、日本への関心は世界的に高まっていることもあり、館のWEBサイトを閲覧している人は、世界中にいるかもしれません。

そこで、I.B.MUSEUM SaaSのネット公開機能では、英語での検索サイト作りに対応。翻訳原稿さえあれば、いつでも2カ国語化が可能です。博物館サイトの役割のひとつに「観光資源の効率的な活用」を実現できる目玉機能ですので、ぜひチャレンジしてみてください。



今回ご紹介した機能のほか、便利機能を詳しく紹介！

<http://welcome.mapps.ne.jp/tips>

I.B.MUSEUM SaaS  
かしこい使い方



ミュージアムIT屋さん、現場を往く！



# 岩手県立博物館 日曜講座 参加レポート

## ◎ 被災資料デジタル化プロジェクト 現場の作業内容をご紹介

### 弊社社員が講師を初担当

弊社WEBサイトなどで何度か紹介しております「陸前高田被災資料デジタル化プロジェクト」。これまではメディアの取材をお断りしてきたのですが、ボランティアの皆様も頑張りがあって作業が少しずつ進んでいることから、事務局では、NHKをはじめとするテレビ・ラジオ・新聞などの取材にお応えしております。現場は本当に地道な作業なのですが、少しでも反響があると、励みになるものですね。

一方で、ミュージアム業界の皆様からの要請などには、一貫してお応えしております。今回は、岩手県立博物館様の「日曜講座」より、当プロジェクトのメンバー自身の講演をご依頼いただきました。

快く引き受けてくださったボランティアスタッフがいます。一方、戸惑うスタッフも。「作業でお役に立ちたくてボランティアに参加しているだけなのに、演壇に立って皆様の前でお話するなんて…」と動揺したのは、弊社の女性スタッフ、Wです。

2名の講師のうち1名を弊社社員が務



めることになったためですが、そもそも、講演自体がまったく初めて。Wは多数の館からご信頼を集める弊社の精鋭ですが、どちらかと言えば現場で黙々と働くのが性分の様子。博物館ITの専門家としての知識や技術は申し分ないのですが、喋るとなると…もう心配で心配で(笑)。

何事も経験ということで彼女に任せることにしたのですが、ほとんど子どものピアノの

発表会を見守る親のような気分だった私は、(多くの親がそうするように)同行することになりました。一応、私は何度か経験がございまして、万一の場合はピンチヒッターに…と。

### 参加者の皆様の熱意に感動

東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市立博物館様の写真資料を中心に、洗浄からデジタル化までの処理を行うのが件のプロジェクト。岩手県立博物館様は、窓口としてプロジェクトをサポートしてくださっています。今回、「平成の津波被害と博物館 ～被災資料の再生をめざして～」という企画展が開催されていることもあって、「日曜講座」のテーマが文化財レスキュー活動となったようです。

さて、「陸前高田被災資料デジタル化プロジェクト」では、東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市立博物館様の写真資料を中心に、洗浄からデジタル化までの処理を行う作業を行っております。岩手県立博物館様は、被災地側の窓口としてプロジェクトをサポートしてくださっています。今回、「平成の津波被害と博物館 ～被災資料の再生をめざして～」という企画展が開催されていることもあって、日曜講座のテーマが「文化財レスキュー活動」となったようです。これは、プロジェクトで活動していることを差し引いても、弊社がお役に立たなければならない大きなポイントのひとつ。ご依頼をいただいた以上、「参加しない」という選択肢などございません。

waseda goes to museum...



とは申しまして、なにぶん慣れないW。本人以上に心配する私は、パソコンとプロジェクタの接続に手間取った開始前からハラハラしっぱなしです。

ところが…いざ始まってみると、これがなかなか堂々とした話しぶり。時間が進むにつれて、安心から感動へと移行していた私は、聴衆の皆さんのご反応が気になり、チラチラと後ろを振り返ってみました。すると、ご参加の皆様はとも熱心に話に耳を傾けてくださっているご様子。

後半は安心して見ていられる状態で、少し余裕が出てきました。印象的だったのは、質疑応答で、お礼の言葉を発する方がおられたことです。地元の文化を守るのに、遠く離れた東京の若いスタッフが汗を流していることに対して、感謝しておられるのでしょう。

そう思って、改めて会場を見渡してみると、実際、Wの親くらいにあたる年齢の方が大半でした。講演に対する高いご関心と、頑張る若者たちへの暖かい眼差しが感じられました。「他のメンバーにもぜひ見せてあげたかったなあ」と思わずにはいられませんでした。

### 広がれ、「文化を守ろう」という思い

さて、講演の内容は、海水損した写真を乾燥させ、クリーニングし、デジタルデータ化して現物を保管するまでの作業過程の紹介が中心でした。作業風景を写した写真や、実際の作業道具を示しながらの、かな

り具体的な説明です。

前例のない作業であるため、メンバーが試行錯誤を繰り返して最適な方法を確立した様子、また、くつついてしまったガラス乾板を時間をかけて剥がす様子など、地道な作業の数々がスライドに映し出されるたびに、参加者の多くが大きく頷いておられました。決してその「大変さ」自体をお伝えしたいわけではないのですが、それでも分かってくださる方々がいらっしやると、メンバーの悪戦苦闘を知っている私としても報われる気分です…。

手前味噌ではありますが、公平に見て、講演は大成功だったと思います。私自身はまるで出番がなく、単なるおせっかいな同伴者で終わったことが、何よりの証拠です。また、テーマはプロジェクトの活動紹介だったのですが、内容以上に、活動に対するメンバーたちの真摯な姿勢を知っていただけたことが、何よりも嬉しく思いました。今回の講座が、「文化を守ろう」という思いが広がる一助となることを願ってやみません。

貴重な機会を与えてくださった主催者・ご関係各位に、改めてお礼を申し上げます。この講演は、実に良い経験となりました。本当にありがとうございました。



I.B.MUSEUM SaaS 新機能プレビュー

# 検索結果を素早く再現 「クリップリスト」機能

早いもので、博物館クラウド「I.B.MUSEUM SaaS」が第1号ユーザをお迎えしてから、もう2年以上が経過しました。今では、弊社の想像を上回るほどに使い込んでくださる館も珍しくなくなりましたが、その分、使い勝手に関するご要望をお聞きする機会も増えました。

弊社では、そんなヘビーユーザの皆様にご喜びいただける機能を多数計画中。そこで今回は、その中のひとつ、仮称「クリップリスト」機能の情報を、少しだけご案内。「小さな改善、大きな効果」の見本のような機能です。

## 機能1 リストの抽出

I.B.MUSEUM SaaSでは、検索結果のリストに名前を付けて保存することができるのですが、これは使えば使うほど便利な機能とのご評価をいただいています。例を挙げて少しおさらいしますと…

①所蔵作品から水彩画展を企画しようとしていて、とりえず「技法」に「水彩」と登録されている美術資料を検索します。すると…

②水彩画がずらっと表示されました。

「さあ、これから実際に展示する作品を絞り込もう」ということで、1点ずつ吟味しながら、画面右の「除外」ボタンで、今回展示しない作品を外す作業を行います。

でも、そんな時に限って、「いけない、もう帰る時間!」となりがち。続きはまた明日となるわけですが、途中まで作業したこのリストを、また検索してやり直すのは大変です。そこで…

③このリストに名前を付けて、システムに保存します。

そして翌日、このリストをもう一度呼び出せばいいのですが、すでにリストが山のようになっていたら、前日に保存したリストを探し出すのに一苦勞。

もし、職員数が多い館だったら、何人もの人がリストを保存しているはず。プルダウンでリストを探す時に数十種類のリストがあったら、さらに同僚が似たような名前のリストを保存していたら…自分が使いたいリストを見つけ出すのは至難の業。④の図のような感じで、むしろ手間がかかります。そこで…

⑤呼び出したいリストをキーワードで絞り込みます。

これが、現在開発中の「クリップリスト」です。右の画像は企画段階の画面サンプルですが、キーワードでリストを抽出することができます。こうすることで、たくさんのリストを保存していても、使いたいリストを簡単に選び出すことが可能になるのです。

## 機能2 リストへの追加

さあ、仕事を続けましょう。リストに資料を加える時には、資料詳細画面(カード画面)を見ていることが多いと思います。カードを見ながら、「あ、これは加えよう」という動きですから、そのまま「カードをリストに加える」という機能があれば便利。今回、これが可能になります。

「水彩画展」の企画立案中、展示する作品を加えたいと思って、データベースを検索。詳細(カード)画面をパラパラとめくっていると、新たにリストに加えたい作品が見つかりました。⑥の画面です。

そこで、いま見ている水彩画を、作りかけのリストに加えることができるボタンを用意。ショッピングサイトでカートに入れるのと同じような動作ですが、ここでは複数のリストから

追加先を選ぶことができます。

もうひとつ、便利な機能が。たとえば、「10年前に同じ美術館に貸し出した」とか、「3年前の展覧会に展示した」「昨年の修復候補に挙がっていた」など、追加先のリストから資料の足跡を辿ることができるようになります。

その資料が何らかの検討対象としてリスト

アップされた履歴を素早く確認したい時、⑦のようなボタンのクリックで対応できるようにする予定です。

以上2点の機能を、25年度上半期中には搭載する予定で、準備を進めています。使い込めば使い込むほど、使ってくださる方のお仕事に役立つ。I.B.MUSEUM SaaSは、今後もそんな道具となることを目指して参ります。



⑥



⑦

※掲載の画像は開発中のもので、すべてイメージです。



## Column

## 同じ気持ちと、違う視点。

Text：内田剛史

ある大学の先生から、草間彌生作品の写真を見せていただく機会があった。冊子の中の一コマに過ぎない写真であったが、それは作品の写真というより海の写真で、草間彌生のオブジェは右下に小さく写っているだけ。瀬戸内のアートプロジェクトで使われた写真だそう。

「これを学芸員が撮ると、画面のほとんどが作品になる。自分も学芸員時代はそうだったが、作品そのものを大切に考えるからね」と言って、先生は苦笑された。瀬戸内のアートプロジェクトは、年間で100万人前後を集める人気を誇る。訪れる人は、作品を個別に鑑賞するのではなく、瀬戸内の海、島々の風景とアートが一体となった「全景」を味わいに来るのだそう。

先生は、大学病院の入院患者にアートを楽しんでもらうことで、何かと辛いことが多い入院生活に変化と活力をもたらすための「アート・イン・ホスピタル」に取り組んでいる。当日は、「クラウド型データベースシステムをどう活用できるか」について議論したのだが、恐らく、私の話に退屈されたのではないかと思う。

私は、「作品の画像や解説をデータベースに登録し、実際の展示通りにWeb上でスライドショー型の展覧会を開いてはどうか」と提案した。しかし、帰路でアートプロジェクトの写真を思い

出して考えるに、先生の真意に気づき、赤面する思いだった。

アート・イン・ホスピタルで発信したいのは、何をどう展示したかではなく、アートに彩られた病院全体の空気と、患者の顔。アートが患者のメンタルにどう好影響をもたらすのかを記録・分析することで、芸術が医療に貢献する可能性を追求するのだが、これに対して「ITがどう貢献できるのか」を問われていたのだ。

もともと美術館で学芸員を務めておられた先生は、館を見限って大学教授へと転身されたわけではない。アートの力を現実の社会に具体的な形で引き出すことで、美術館の再評価につなげたいとお考えなのだろう。そうした場で、従来型の発想は、いかにも心もとない。それは、IT活用法においても同様なのだ。

当社は、「学芸員と同じ目線とともに歩む姿勢」を社の方針とすることで、一定の支持を得てきた。その一方で、ITには「現場の業務フローを変革する」ことが期待されている。悩みや心情を共有しつつ、第三者としての異なる視点を保ってこそ、内部からは発想できないソリューションを生むことができるようになる。

業者が最初から視野を狭めていては、博物館の潜在力を摘むことになりかねない。そう教えられた一日となった。

